

## 響き合う文学教材 『山月記』と『ひよこの眼』

西尾 勝彦

### 1 はじめに

文学作品を読む前と読んだ後で自分の周りの世界が、一変したように感じた経験をした人は多くいるだろう。文学は、目に見えない重い力を秘めている。

文学教育研究の場では、テキスト論の台頭以降、正解到達主義が批判され、文学作品の読みに正しいものは無いというのがほぼ共通認識となった<sup>①</sup>。これは、教科書の指導資料を開けばすぐに納得できる。以前までなら必ず掲載されていた「主題」という文字がどこにも見あたらないのだ<sup>②</sup>。長年にわたって尊重されてきた「主題」という正解は、教育の場から姿を消しつつある。そうすると文学教育を行う理由もかすみがちとなり、文学教材を利用して、「読みの客観性、読みの確かな技術の習得を目指す方向

へ」<sup>③</sup>向かっているという。文学特有の力に立ち向かう「読み」の指導は、少なくなってきたというのが現状である。これは、もちろん国語科教育だけの問題ではなく、実利的なもの（資格取得や検定試験等の隆盛）やマニュアルを尊ぶ最近の社会状況も影響を与えていると思われる。社会や学校は常に正解や客観的な数値を求めているが、文学には正解がないことが明らかになったため、非常に扱いづらく真正面から取り組むことがはばかられているのではないだろうか。

近年、文学研究と国語教育研究の交差を目指す田中実氏が「語り」を読むことの重要性を説き続けている<sup>④</sup>。小説のプロットや登場人物の関係を読むだけではなく、それらを語っているものを読むことが、「作品の意志」につながると述べている。また、中村龍一氏は「読み」のむかうところを『主題・思想』から、『作品のへ問い』を問いつけることへ<sup>⑤</sup>と提案している。氏らの取り組みは、

正解到達主義を乗り越えて、文学の力に真正面から向き合おうとしている。

最初に述べたような文学の見えない力に出会う、そして生徒に出会わせるには、作品の持つ力の根源に可能な限り近づきうる教材研究の方法が求められている。本稿では、定番教材の『山月記』（中島敦）と比較的新しい『ひよこの眼』（山田詠美）を取り上げその教材価値に迫りたい。

この二教材は教科書『高等学校 現代文』（三省堂、二〇〇五年三月）の「小説（二）」の単元に並んで収められている。これらの教材が並べられている意図は、『指導資料①』『総説編』<sup>⑤</sup>にその単元の副題として「喪失の悲しみと生」とあることからもうかがえるが、詳しい説明はなされていない。

この二作品はプロットの構成に類似点を指摘できる。『山月記』のプロットを要約すると「自閉的で孤独な李徴は、虎になったことで人間性を取り戻すが、最後に姿を消す悲劇」である。『ひよこの眼』のそれは「転校生で孤独な相沢は、亜紀と出会うことで希望を取り戻すが、最後に姿を消す悲劇」である。

ところで、これらの作品を連続して読むと、プロットの共通部分を感じるだけでなく、お互いの作品が、それぞれ響き合っているような、つまり、深い部分でのつながりが感じられるのである。時代

も、舞台も、作者も全く異なる二つの作品に一体感が生まれているのである。この点についても最後に考察を試みたい。

## 2 『山月記』

『山月記』は、その文章の難しさにもかかわらず高校生に強烈な印象を残す教材である。授業期間中には、生徒の誰かが後ろの黒板に「李徴」とだけ落書きしたり、定期テスト前になると「虎になりそう」のうめき声も聞こえてくる。読んでいる時はもちろん、読み終わった後もこの作品は胸にもどかしい思いが残る。「人が虎になる」奇譚としての印象だけではない広がりや心に残る。「語り手」を手がかりとして作品に迫っていく。

### ①複数の「語り手」

『山月記』は、「語り手」に注目すると二つの文脈が存在していることに気づく。田中美氏は「外部から李徴のことや全体の状況やらを説明する（甲）」と、李徴の肉声のみからの過去の自己を分析的に省みる（乙）<sup>⑦</sup>の存在を指摘し、小説の終幕には「語り手（甲）」が李徴の「語り手（乙）」に「同化」されているとしている。そのため、李徴は結局、自己を対象化できず「自閉」のなかの自己分析にとどまった」と述べている。

丹藤博文氏は、「この小説は三人称の形式をとりながらも、その

ほとんどは李徴の視点に立つて語られているのであり、袁倬の視点に立つことはあっても、けつして李徴を対象化したり相対化するものではない<sup>⑧</sup>と述べ、李徴と袁倬の間には「対話も批評もない」と結論づけている。

二氏ともに李徴の「語り手」と比較して李徴ではない（非李徴）の「語り手」の弱さを指摘しており、この「語り手」の関係は対等でないことが明らかと言えよう。しかし、李徴の「語り手」と非李徴の「語り手」の関係について、「同化」、「対話も批評もない」という評価が果たして妥当といえるだろうか。その関係性に留意しつつ、まずそれぞれの語りの内容に考察を加えたい。

非李徴の「語り手」は、李徴と袁倬の過去の関係について次のように簡潔に語る。

袁倬は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少なかつた李徴にとつては、最も親しい友であつた。温和な袁倬の性格が、俊峭な李徴の性情と衝突しなかつたためであらう。（傍点は筆者）

傍点部「とつては」に注目すると、進士に登第した当時の李徴と袁倬それぞれの友人関係図が浮かび上がる。李徴の友人関係は袁倬などごく少数にとどまるのに対し、袁倬には広い友人関係があつた

ことが示唆されている。李徴にとつて袁倬は、かけがえない友人であるのに対し、袁倬にとつて李徴は多くの友人のうちの一人にすぎないという解釈も成り立つ。もちろん、虎となつてしまつた孤独な李徴と「監察御史」に出世した「供回りの多勢な」袁倬の間にはおよそ考えられうる長い距離が隔たつている。「行列」を従えた袁倬に対して「一匹の猛虎」李徴が顔を合わせる出会いの場面は、かつての交友関係の相似形がまだ続いていることを象徴的に語つているといえよう。

「その声は、わが友、李徴子ではないか？」袁倬の呼び声で始まる出会いの場面での「李徴の声」をたどつてみる。

叢の中からは、しばらく返事がなかつた。しのび泣きかと思われるかすかな声が時々漏れるばかりである。ややあつて、低い声が答えた。「い、かにも、自分は、隴西の、李徴、である。」と。

自分は今や異類の身になつてゐる。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。かつまた、自分が姿を現せば、必ずきみに畏怖嫌厭の情を起させせるに決まつてゐるからだ。しかし、今、凶らずも故人に会うことを得て、愧赧の念をも忘れるほど懐かしい。どうか、ほんのしばらくでいいから、わが醜悪な今の外形を厭わず、かつてきみの友李徴であつ

たこの自分と話を交わしてくれないだろうか。(傍点、傍線は筆者)

いかに語っているかに注目すると傍点部では、漢文書き下し調の威厳ある「自尊心」の高い李徴そのものの語り口であるといえよう。

ところが、同じ文脈上の傍線部に注目すると同一人物の発言とは思えないほどの懇願調なのである。この急激な語りの変容には、対話を求めてへりくだる李徴の思いが働いているといえよう。先述したが、かけがえのない友人袁慆との邂逅は、李徴にとって「図らずも」と自ら述べたように千載一遇のチャンスであった。ただし、袁慆にとつては「超自然の怪異」であった。両者のこの出会いにかけるとは隔たっている。では、李徴と袁慆は話を交わしその隔たりを縮めることができたのだろうか。

李徴の「語り手」は、登場するや虎になった過去の経緯、虎としての現在の生活、「いま少したてば」と未来の予想をよどみなく理路整然に語ってゆく。しかし、語る相手は袁慆でありながら、実は袁慆でなく自己でしかなかった。先ほどのへりくだった李徴の姿はもう消えてしまったのである。李徴の心情のもつとも核心部分について次のように語る。

ああ、まったく、どんなに、恐ろしく、哀しく、せつなく思っているだろう！ おれが人間だった記憶のなくなることを。この気持ちはだれにもわからない。だれにもわからない。おれと同じ身の上になった者でなければ。

もう一点、後半部分の語りを挙げる。

天に躍り地に伏して嘆いても、だれ一人おれの気持ちをわかってくれる者はない。ちようど、人間だったころ、おれの傷つきやすい内心をだれも理解してくれなかったように。

李徴は袁慆からの答えや反応、慰めを全く期待していないというより、そもそも拒否しているといえよう。自己陶酔的な語りで徹し、対話を断ち切っている李徴から袁慆の姿は見えていない。「叢の中」に身を隠した虎李徴と「叢の傍らに立」つ袁慆は、物理的のみならず対話の相手としてもお互いに見えてはいない。非李徴の「語り手」は李徴に対して黙して語る道を選んだ。李徴の詩に対して次のような評価を袁慆は下す。

しかし袁慆は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。

なるほど、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品になるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないかと。

ここでは「どこか欠ける点」<sup>⑨</sup>の議論はひとまずおいて、袁憐の沈黙の語りに注目したい。袁憐の李徴に対する沈黙の語りは、もう一カ所「袁憐は昔の青年李徴の自嘲癖を思い出しながら、哀しく聞いていた」にもみられる。この二カ所の語りには、「このままでは」という表現に凝縮される通り、「昔」から何の変化もしていない李徴に対する批判が込められているといえよう。何も昔から変わらぬ君は哀しい、何を言っても君はこのままだろう……。『読み手』には、このメッセージが届くが、李徴には届かない（届けないとすべきか）。李徴の「語り手」が、相手との語りを断ち切ったと同様、非李徴の「語り手」もその言葉を李徴に向けていることがなかった。非李徴の「語り手」は直接李徴への批判を述べないものの、沈黙の内情を「読み手」に語ることで批判を行っていたのである。

② 「語り手」の關係  
「語り手」の關係を整理し、どのような作品の問いかけが生じているのかを探っていきたい。

李徴の「語り手」は、非李徴の「語り手」に対して独善的な語り  
に終始していた。先に指摘したように袁憐との対話を受け付けない  
語りが繰り返されている。李徴の「語り手」の語りは、常に李徴自  
身へ向けられており、非李徴の「語り手」は視野に入っていない。  
ただ、李徴の願い（詩の伝録、妻子の生活援助など）を聞く相手と  
して袁憐が設定されているばかりで、批評を伴う対話が成立するこ  
とはなかった。

一方、非李徴の「語り手」は、李徴の「語り手」の語る内容の  
「不思議」や対話を求めない語り口に対して、基本的に傍観者とし  
ての立場をとった。李徴に直接、批評の言葉を投げかけず、「読み  
手」に向けて間接的に李徴に対する批判の心情を語っている。その  
理由をプロットに沿って言えば、「温和」な袁憐の性格に帰するこ  
とはできる。しかし、ここで「語り手」の關係から考えれば、李徴  
には語らず、「読み手」に語ることは、李徴の「語り手」に対して  
非李徴の「語り手」が不信任を表明しているといえよう。

このような李徴の「語り手」と非李徴の「語り手」の關係は互い  
に孤立しているといえる。この孤立を生み出したものは、李徴の妻  
子は救えるが、虎、李徴は救えない、という二つの「語り手」の共通認  
識にあるといえよう。虎、李徴が人間に戻り、その望みを叶えるとい  
う選択肢は予め排除されている。李徴の「語り手」は李徴を救えな

いし、非李徴の「語り手」も李徴を救えないのである。互いに最も肝心な点について絶望し、諦めていたので「語り手」は解決策を求めて語り合うことがなくすれ違ったまま別れを迎えたといえる。

こうした「語り手」たちからは「人智を越えた運命に対する無力感」が漂っている。二つの「語り手」は、この大きな力を前になすすべもなく立ちつくしている。「読み手」は、「語り手」の無力感を越えて、何を考え、何を語ることができようか。教室の教師と生徒たちに投げかけられたこの問いかけは重い。

### 3 『ひよこの眼』

山田詠美のこの作品は、いわゆる「学園もの」であり、高校生にとつては読みやすい文章である。ただし、プロットは恋愛を主とするものの「語り手」に注目すると学校の存在と死が深い影を落とすっており授業の際には注意を要する。

#### ① 「語り手」と「学校」

「語り手」は、現在、大人になったと考えられる「私Ⅱ亜紀」であり、一人称回想形式の語りとなっている。ここでは、「語り手」が「学校」というシステムと「私」の関係をどのように語っているかという点について考察を進めていく。

中学三年の九月、転校生相沢幹生の登場場面から学校は、椰揄さ

れている。教師は相沢に転入の挨拶を述べさせようとするが、彼は全くの「うわのそら」で、教師は怒ってしまう。

教師は、顔を赤らめて、咳払いをした。

「おい、相沢、おい、聞いているのか!」

彼は、ふと我に返ったように、怪訝な表情で、教師を見た。

「挨拶ぐらいできんのか、おまえは。」

彼は、小さく肩をすくめて、頭を下げた。私たちは、いっせいに吹き出した。同じ年齢にしては、妙に超然とした雰囲気がおかしかった。私たちのほとんどが、担任教師を嫌っていたので、彼のような態度は、私たちの気に入った。

顔をまっ赤にして怒る教師と「妙に超然とした」生徒の対比は、本来あるべき態度の転倒を示している。「語り手」の視線は学校を象徴する存在の教師に対して冷たい。ここでは、「私たちⅡ」私を含むみんなが、教師という権威を無力化しているといえよう。

しかし、「みんな」はふとしたことがきっかけで「私」に襲いかかる。親友の春子は、「みんなが言ってるんだけど」と前置きをして、「みんな、あんたがいつも相沢くんのこと、ぼおっと見てる」と亜紀が相沢を好きになっているという噂が流れていることを伝え

る。決して春子自身の意見ではなく、あくまでも「みんな」の噂であることが繰り返して述べられている。教室において「みんな」とは、実体不明の大多数であり、できあがってしまった雰囲気であり、それに逆らうことは不可能な権力でもある。

そして、学園祭実行委員選出の際に、「ある男子生徒」が「相沢と亜紀なんてどう？」と言うと「いっせいに拍手が起こり、クラス委員の疑問の声も次の声にかき消されてしまう。

「でもさ、卒業までに、一個ぐらい思い出を作つていたほうがいいぜ。」

「そう、そう、二人は、息もぴったり合ってるし。」

みんな、げらげらと無責任な様子で笑っていた。

顔の見えない「無責任」な「みんな」は、執拗に「私」を追いつけていく。「うつむいて、涙をこらえ」ている「私」を救ったのは、幹生であった。「おれ、やるよ。」と答え、多数決で決定されるとすぐさま「私」のもとに来て、「みんなが見つめている中で」声をかける。

帰ろう。きみんち吉祥寺でしょ。おれも中央線だから。

「私」はえたいの知れない「みんな」の前で徹底的に無力な存在であった。結果的に、幹生だけが、「みんな」に立ち向かったようにみえる。勇気があったから、住んでいる場所を知っていることから亜紀のことが気になっていた、などと解釈できるが、やはり、幹生が「みんな」の一員ではなかったことが最大の原因だろう。教室、学校という同調圧力の厳しいシステムから幹生は外れている。その理由を、転校してきたばかりであるからとか彼の家庭事情（父の病気に伴う貧困）だけに帰することはできない。「私」はのちに幹生に対して「物事を正確に見つめることのできる人」、「人生に対して礼儀正しい人」と語っている。「みんな」の無責任さと浅はかさが「自分」の考えに基づいて行動する幹生の存在によって浮き彫りにされている。「みんな」は、一人ひとりの「自分」に戻らない限り物事を正確に見つめることができず、人生に対しても礼儀正しくないとやっているに等しい。そして、「みんな」が存在するのはこの教室だけにとどまらない。現在、大人になったと考えられる「語り手」の「私」は、「みんな」を作り出す「学校」というシステム of 被害者として、そして幹生の言動を通じて「みんな」への批判者として語っているといえよう。

## ② 「語り手」の「諦観」

「語り手」の「私」は、主に中学三年時の幹生との出会いと別れ

を中心に語っているが、別に二つの時間軸の語りも存在している。まず、一番古い時間軸の回想は、最も中心に語られる中学三年生時よりも母の言葉によれば「だいぶ前」とされる。

あの時、ひよこは、自分の死を予期しているかのように澄んだ瞳を見開いていた。ただ一点を見つめながら、私の手の上で、静かに、その時を待っていた。私は、その様子を見て、なぜか恐怖を感じたのを覚えている。何もかも映しているようで、何も見えない目。ひよこが自分の死期について考えていたとは思えない。けれど、たしかに、死は、ひよこをとらえていた。母や妹は、悲しみて肩を落としていたけれども、私は、ひよこを見守り続けたのだ。まるで、憑かれたように、私は、その小さな生き物が、最後の力を振り絞り、目を見開いているのを見続けていた。ただふしぎだった。諦観ということばを、そのころ、知るよしもなかったけれども、私は、ひよこの瞳を見つめながら、そのことを思っていたような気がする。(傍線は筆者)

傍線部の一文は、現在の「語り手」から過去の「私」の体験への意味づけである。最も古い回想を「語り手」が行う時、そのころの記憶は「諦観」という言葉で要約された。「ひよこの目」と「死」

を見つめる十代前半とおぼしき「私」の気持ちを説明する言葉として、現在を生きる「私」は「諦観」を選んだ。

作品の主要部を占める中学三年生時の回想で、幹生の瞳とかつて見つめた「ひよこの目」の類似に気づき、次のように語る。

死を見つめている瞳。あの人は予感しているのだ。でも、私に、いつたい、なにがしてあげられるだろう。ひよこは、とうの昔に死んでしまったのだ。

ここで「私」が「あの人」の死を予感していると語らずに「あの人は予感している」と語っている。しかし、それは推測に過ぎず、予感しているのは間違いなく「私」である。あえて、「あの人は」と語ることによって、他者の死を予感する自分の恐ろしい能力から目を背けようとしている。なぜなら、「なにがしてあげられるだろう」となかは開き直るしかないように、自分の悪い予感に対して、何ら対処ができず、なすすべを持たなかったからである。

そして、もつとも新しい時間軸の回想として、作品の末尾に次のように語られる。

それから、何度か、私は偶然、ひよこの目に出会うことがあ

った。街の雑踏の中で。あるいは、電車の中で。そんな時、私は、困ってしまうのだった。片手を握り締めながら、私は、こう尋ねてみたい衝動に駆られてしまい、慌てる。もしや、あなたは、死というものを見つめているではありませんか、と。

中学三年生、つまり幹生の死以降、現在に至る時間軸の中でも「私」は「ひよこの目」「死の予感」に遭遇し続けている。そこでの態度は「困ってしまう」とあるが、現在の「私」は、目の前の死を予感させる「あなた」に「死というものを見つめているのではありませんか」とまさに語りかけようとして躊躇している。ここには、これまでの「諦観」やなすすべのない無力感を何とかうち破ろうとする意志が働いているといえよう。<sup>①</sup> 幹生には言えなかった言葉が、もう少しで語られようとしているのである。幹生を救えなかった後悔が「私」を突き動かそうとしているのである。

### ③変遷する「語り手」

三つの時間軸の語りを整理すると以下のようになる。

「現在の私」は、まず中学三年時の「学校」とそこに集まる「みんな」を一人の転校生「幹生」との比較を通して批判している。しかし、その恋人というより同志的な「幹生」に死の危険が迫っていることを察知しながら何もできずに失った。次に、それより「だい

ぶ前」に体験したひよこの死を見つめる当時の「私」の心境に「諦観」という言葉を与えた。それは「幹生」に対して何もできなかった「私」に対する「諦観」にもつながっている。現在でも未だに見ず知らずの他者の目に死を予感して、自ずと「幹生」を思い出している。そして、その「諦観」を乗り越えようと模索する「私」を語っている。

「私」は、過去を「諦観」という言葉を用いて語った。そして、最後に自分を呪縛し続ける「諦観」を乗り越えようと逡巡する現在の「私」を語った。このことから「私」は、他者の死を前にしてこれまでの態度を変更しようとしていることがいえよう。「諦観」から「救済」への過程を「語り手」の「私」は歩みつつある。この変化の過程にこそ「ひよこの眼」の教材価値がある。作品からの問いかけは、「生き続けることの大切さ」であろう。「私」は生き続けているからこそ「生」と「死」を語ることができたのである。

### 4 響き合う文学教材（まとめにかえて）

最初にプロットの類似を指摘したが、「語り手」のあり方は、全く異なっている。これまでに述べたように「山月記」では、二つの「語り手」が登場し、「ひよこの眼」は一人称回想形式であり「語り手」は一つであった。

そして、「語り手」の関係や姿容に着目して得られた作品からの問いかけは、『山月記』が「人智を越えた運命に対する無力感」であった。最後の場面で虎李徴が「白く光を失った月」に向かつて行う「咆哮」には、この絶望感が籠められている。

『ひよこの眼』から発せられた問いかけは「生き続けることの大切さ」である。「私」は、他者の死を予感するという特殊能力を持っている。ところが、その死を止める術を持たないので、普通の人よりも他者の死に対して後悔と喪失感が深まっている。しかし、生き続けることにより、つらい過去を語り、それを乗り越えようとしている現在の語る事ができたのである。

この二教材からの問いかけは互いに呼応しあっているといえよう。『山月記』の「語り手」から発せられた問題は『ひよこの眼』の「語り手」によって回答がなされているのである。二つの作品は相互補完的に響き合っており、『山月記』『ひよこの眼』という順序で授業を行うことは、互いの教材価値を高めることになろう。<sup>⑫</sup>

## 注

- ① 藤原和好「文学教育の最近の動向と今後の展望」(『日文協国語教育No. 35』、日本文学協会国語教育部会、二〇〇五年六月、四七頁)  
 ② 「高等学校 現代文」指導資料③(三省堂、二〇〇五年三月、高等学校校現代文編集委員会編)

## ③ 注1に同じ

④ 「小説の力」(大修館書店、一九九六年二月)、『読みのアナキーを越えて』(右文書院、一九九七年八月)、『これからの文学教育』のゆくえ(右文書院、二〇〇五年七月)などに述べられている。

⑤ 中村龍一「教室で文学作品を愉しく、面白く読むために」(『これからの文学教育』のゆくえ、右文書院、二〇〇五年七月、二〇八頁)

⑥ 「高等学校 現代文」指導資料①「総説編」(三省堂、二〇〇五年三月、高等学校校現代文編集委員会編)

⑦ 田中美「『自閉』の咆哮」(『小説の力』、大修館書店、一九九六年二月、一六六頁)

⑧ 丹藤博文「『山月記』あるいは自己解体の行方」(『新しい作品論へ、新しい教材論へ3』、田中美・須貝千里編著、右文書院、一九九九年六月、一五〇頁)

⑨ 人間性、愛などの欠如が考えられるが特定できない。

⑩ 神田由美子「ひよこの眼」(『新しい作品論へ、新しい教材論へ6』、田中美・須貝千里編著、右文書院、一九九九年七月、一三三頁)

⑪ 牛山恵氏は「ひよこの眼」の教材価値(『新しい作品論へ、新しい教材論へ6』、田中美・須貝千里編著、右文書院、一九九九年七月、三五頁)の中で、「ひよこの眼との出会いは、「私」にとって、自分を見続けるほかに何もできないという、死の問題とかかわりきれない自分自身を確認することであった。語り手は、死の不条理に向かつて生きる真摯な生を語るとともに、それとかわることのできない孤独な生を語ったのである」と述べているが、同意できない。

⑫ 実際にこの二つの文学教材を用いて授業を行い、「李徴と幹生の共通点」をまとめさせる試みを行った。生徒の意見をいくつか挙げておく。

I 共通点は人が思うようにはいかない点だと思います。それは、李

徴が自分の愚かさに気づいた時にはもう遅く、人間に戻れなかったことで、幹生はせっかく生きようと思ったのに死ななければならなかったことが理由です。(中略) 他にもう一つ、ふたつの物語では周囲に二人の話に真剣に耳を貸す人がいたことです。幹生には亜紀、李徴には袁蓼が二人のあまり開かない心を開かせ、気持ちに楽にさせてくれたのではないかと思います。私達にもそんな心を開かせてくれる人が必要だと思いました。(GM)

Ⅱ (前略) 四つ目は、虎として生きることを決意した李徴と、幹生の死を現実を知った亜紀の心境だと思った。家族や友人を忘れられない李徴の気持ちと好きだった幹生のことを忘れられない亜紀の気持ちは同じだと思う。最後に、「山月記」の月と「ひよこの眼」の眼だと思った。もの哀しさや、淋しさ、すべてを失くした様子が同じだと思う。(MM)

Ⅲ 共通する点だと思ったのは、小説の終わり方だ。どちらも「死んでいく」がそれだけじゃなく、それぞれ「取り戻すこと」ができていると思った。李徴は虎になった頃で人間の心を取り戻し、相沢幹生は亜紀によって普通の中学三年生を取り戻せたんじゃないかなと思った。(後略)(YK)

課題にはないもの自ら「相違点」を指摘する者も複数いた。

Ⅰ (前略) 一つだけ違う点がありました。それは幹生の目はひよこの眼でしたが、李徴の眼は最期まで李徴の眼であるということ。虎になってしまった今でも。(ER)

Ⅱ (前略) 二人の相違点も見えてきます。李徴は挫折しそのまま混乱して虎になった。しかし、幹生はその心の悩みを亜紀と一緒にいることで和らげていたのだと思います。だから李徴が虎になった本当の理由には自分のことしか考えず、家族のことを大切にできなかったからだ

「ひよこの眼」を読んでいます。

自分のことよりもまず人のことを考えて行動し始めれば心に余裕ができるし、自分のことも上手くいくような気が最近します。自分のことしか見れない人は虎になると思います。(IH)

Ⅲ 「山月記」と「ひよこの眼」は両方とも登場人物の李徴や幹生が絶望します。しかし、その絶望の中でも二人には決定的な違いがあります。それは、希望を持たせてくれる人が幹生には現れたことです。李徴はただ自分の今までの行為を悔やみ、人生の後始末をしただけでした。しかし、幹生は先の見えない人生の中でも希望を見つけ動き出すうとしていました。最終的に死んでしまった幹生、おそらく孤独に残りの人生を虎として生きる李徴。私はどちらが幸せだったのかと聞かれたら、幹生だと答えます。(後略)(AK)

※本文中のテキストはすべて『高等学校現代文』(三省堂、二〇〇五年三月)に依った。

#### 【付記】

本稿は同志社大学国文学会(二〇〇五年六月二六日)での口頭発表をもとにまとめたものです。席上、多くのご教示をいただきました。深くお礼申し上げます。